2026_1110「ヤツデの花とキンバエ」日々の理科 4475 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

職場の植え込みで、ヤツデ（八手）の花にキンバエがとまっているのを見つけました。ヤツデはウコギ科の常緑低木で、大きな手のひらのような葉が特徴です。秋も深まった 11 月頃から、白い小花が球状に集まった独特の花序をつけます。多くの植物が花を終えるこの季節に開花する、ちょっと変わった生活史をもつ植物です。

ヤツデの花には、さらに興味深い仕組みがあります。一つの花が、まず雄しべから花粉を出す「雄性期」を迎え、その後、雄しべが脱落して雌しべが成熟する「雌性期」へと移行するのです。これを「雄性先熟」といい、自家受粉を避け、他の花との受粉を促す仕組みと考えられています。しかも、どちらの時期にも蜜を分泌し、昆虫を誘います。

写真の昆虫は、金属光沢の美しい緑色の体をもつキンバエの仲間と思われます。キンバエというと腐敗物に集まる印象がありますが、成虫は花蜜も好み、花粉を運ぶ送粉者として重要な役割を果たします。ヤツデの蜜は、花の少ない晩秋に活動するキンバエにとって、貴重なエネルギー源となるのでしょう。

ヤツデは蜜を提供し、キンバエは花粉を運ぶ。双方が利益を得る「相利共生」の関係です。寒さに向かう季節、何気ない植え込みの片隅でも、植物と昆虫の巧みな営みが続いています。小さな花と一匹のハエが、自然界の奥深い仕組みを教えてくれた一瞬でした。

（2026 年 11 月中旬／お茶の水女子大学構内）

